

# 発達障害(アスペルガー症候群)を持つ児童のビデオフィードバックによる自己刺激的行動低減のための取り組み

## A Case Study of the Reduction of Self Stimulatory Behaviors in Child with Asperger's Syndrome by Self-monitoring through Video Feedback

木村 公江 (Kimie Kimura) 指導: 佐々木 和義

**1. 問題** 通常の学級で、児童生徒一人ひとりに対する教育的ニーズに応じた適切な教育的支援を行うことが重視されるようになった。しかし、通常の学級に在籍している多くのLD (学習障害)・ADHD (注意欠陥多動性障害)・高機能自閉症等の児童生徒が、学習・行動・対人関係・社会的スキル等において問題が多い(加藤, 2004)と言われている。

その指導及び支援の難しさも指摘され、学習能力の問題だけでなく行動面の問題で困難を感じているという報告もある(廣瀬・東條, 2002)。様々な問題の中で自己刺激的行動に焦点を当てると、この行動が生起すると自分の世界に没頭し、授業への参加や課題への取り組みが阻害されてしまい学力の低下を招く一因ともなる。しかし、この行動は内的な覚醒状態を自身の適正レベルに維持するホメオスタシスの機能がある(林, 2000)ともされている。本人にとっては必要なものであっても、それを黙認しては、本人はもとより周りへの弊害も大きく、障害に起因する二次的障害の要因にもなりうる。従って、この行動を無くすのではなく、低減させる必要があるのではないかと考える。

**2. 目的** 無意識的な行動を意識化させるためにビデオフィードバック (以下, VF) を用いて自己刺激的行動の低減について単一事例介入研究を行う。心理的な安定と学校適応の阻害という二面を持つ行動を低減させることにより、心理的安定も図りつつ授業への集中力を高めていけるような介入の在り方を検討する。さらに二次的障害に結びつかぬよう予防するためのセルフコントロールも目指す。

**3. 方法** 調査対象児: 関東圏内公立小学校 (通常学級) 4年男児 (アスペルガー症候群) 1名, 調査時期: 2012年10月~11月, 手続き: 介入を行うのは国語と社会。授業で注意や集中に影響し、また周囲の児童にも影響が及びがちなものとして「手と頭部の常同行動」(以下, 手・頭), 「手や指をなめる・しゃぶる」(以下, なめる・しゃぶる), 「においを嗅ぐ」(以下, におい), 「独語」を標的行動とした。ベースライン(以下, BL)用のビデオ撮影をし、それを編集し「テレビ学習」としてVF。介入期にはビデオ撮影や自己評価カードへの記入を行った。フォローアップ後、授業開始から30分間を20秒間インターバル記録法を用いてBLと比較した。

**4. 結果** 標的行動の出現は90インターバル中、国語で43インターバル (47.78%) に、社会は46インターバル

(51.11%) であった。その後、「テレビ学習」としてVFし、自己評価カードへの記入などの介入を行った。この時は「なめる・しゃぶる」「におい」の標的行動はほとんど見られなくなった。他の2つの標的行動の出現も減少した。その後、検証用ビデオの撮影を行い、標的行動の変化を査定した。

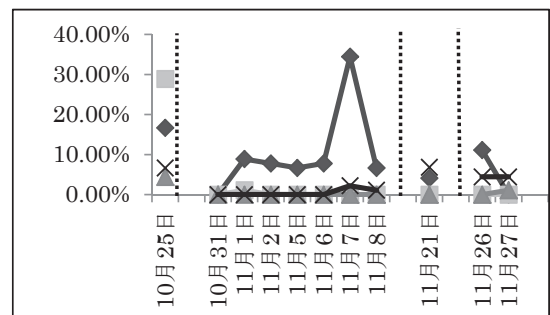


Fig.1 国語における標的行動の変化

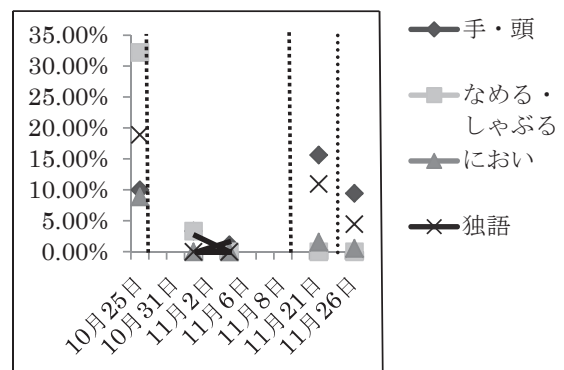


Fig.2 社会における標的行動の変化

**5. 考察** 自己刺激的行動は、教科や授業形態に影響されることが、時間つぶしや現状から逃れるために行われることなどが先行研究や本研究からもわかった。本研究では4つの自己刺激的行動の低減を目指したが、どの標的行動も低減した。その要因としてVFにより好ましくない行動をしている自分に気づくことができ、改善への取り組みの意識を強く持てたこと、さらに本児の特性として、自己評価カードが行動改善に効果的であったことなどから、セルフコントロールを促進させたのではないかと考える。また、出現を見なくなった標的行動があったので、これは一過性のものであったと考えられ、新たに表れた自己刺激的行動は、定着しないうちに低減させていくことが大切なのではないかとも考えた。